粟島における伝統・文化に対する子どもの意識

―「釜谷獅子舞」についての質問紙調査を通して―

早瀬　博典

Ⅰ．はじめに

伝統・文化が学校教育に取り入れられた背景には，文部科学省(2002)による「学校教育における文化芸術活動に関する基本的な方針」という提言がある。そこでの伝統・文化は「他者に共感する心を通じて，人と人とを結び付け，相互に理解し，尊重し合う土壌を提供するものであり，人間が協働し，共生する社会の基盤」として捉えられ，「子どもたちが優れた文化芸術に直接触れ，親しみ，創造する機会を持つことができるよう，創造的な体験の機会の充実など，文化芸術に関する教育の充実」が掲げられている。

上記の提言以後，中村・高橋(2009)が伝統・文化の教材化を試み，大畑(2010)が小学校社会科における伝統・文化学習のモデル授業を開発するなど，学校教育と伝統・文化の関わりについて研究がなされてきた。また，峯岸(2007)は伝統・文化の教育における意義を論じる中で，子どもは伝統・文化の学習を通じて「ヒトが共生，共存することの意義を自覚」し，「文化に対して相対的，相補的にとらえていく視点」を確立することが可能であると述べる。これらの研究における伝統・文化は，学校や地域の学びに活用されることで地域を活性化させたり，次世代の子どものアイデンティティを育むといった役割を持つ「一教材」として捉えられているといえよう。さらに生田(2003)は伝統・文化学習の意義として，伝統・文化の「形」の学びだけではなく，「文化・社会的価値」を学ぶ「相互に拡張的かつ生成的な学び」を挙げ，その成立の為には，子どもたちが伝統・文化に関わる取組みに「参加」することが不可欠であるとする。この指摘は，伝統・文化学習が子どものアイデンティティや価値に働きかけるものであり，単純な事物の記憶には留まらない，人間形成という側面を持つことを示唆している。

ここまで述べてきたように，伝統・文化学習は子どもの内面に働きかけるものである。それゆえ，子どもたちが伝統・文化に対してどのような意識を持っているかは，

学習を構想する上で重要な要素となる [1]。しかしながら，子どもの日常生活においては地域社会との関わりの希薄化が課題として横たわっており，伝統や文化に触れる機会が多いとは言い難い。一例として，文科省と国立政策研究所が 2016 年に行った調査 [2]においては，地域社会の問題に対する積極的な関心を持つ児童・生徒の割合は33.5%に留まるといった結果が示されている。このような状況から，伝統・文化学習を拡張的かつ生成的な学びにしていく為には，子どもが伝統・文化に対して抱いている意識を捉えておくことが重要といえる。伝統・文化と子どもの意識に関する先行研究には，三浦・大谷・大野(2009)による伝統芸能の運営団体と学校に対する子どもの意識についての調査や，林(2016)が行った伝統・文化としての和服に焦点付いた意識調査などがみられる。一方で，調査を行うにあたり，人口減少地域かどうかといった地域の特性に加えて，伝統・文化の背景や独自性を検討した上での研究は管見の限り十分ではない。少子高齢化が進む日本社会の現状を鑑みると，人口が少ない地域に焦点を合わせた調査は重要である。とりわけ離島のような，本土からの隔絶性を持った地域における伝統・文化への着目は，伝統・文化学習の幅を広げていく上で意義を持つと考える。

本研究の調査地である粟島は新潟県の北西に浮かぶ離島であり，特徴として，東西の両岸に内浦と釜谷の二つの集落が別れて存在していることが挙げられる。各集落はそれぞれ独自の民俗を有しているが，中でも「釜谷獅子舞」は，島の西に広がった山地側に位置する釜谷集落の伝統・文化であり，小人口と隔絶性という島の特徴を色濃く反映している。それゆえ，先行研究の間隙を埋める為に適した題材であると判断した。

以上を踏まえた本研究の目的は，粟島における「釜谷獅子舞」についての質問紙調査を通して，子どもの伝統・文化に対する意識の実態を明らかにすることである。本稿では，研究目的を達成する為に次の三つの手続きをとる。第一に，先行研究と現地調査で得た資料を分析し，島名の変遷と海上交通の歴史に加え，集落における民俗と「相互扶助的関係」について明らかにすることで，「釜谷獅子舞」の持つ背景を具体的にする。第二に，「釜谷獅子舞保存会」関係者への調査と粟島島内で入手した資料，および先行研究から，粟島における「釜谷獅子舞」の位置づけと概要について明らかにする。第三に，粟島浦村立小・中学校に通う児童・生徒への質問紙調査から，彼（彼女）らの「釜谷獅子舞」に対する意識について明らかにする。

Ⅱ．「釜谷獅子舞」の背景

本章では，「釜谷獅子舞」の有する伝統・文化としての背景を具体的にする為，島名の変遷，海上交通，集落の民俗と「相互扶助的関係」について明らかにしていく。

１．粟島の概要と島名・地名からみる蝦夷地との繋がり

本研究で調査地とした粟島は面積 9.86km²，周囲 23.109km からなり，新潟市の北方 63km，最寄りの港である岩船港の北西 35km に位置する離島である。逢坂山(標高 235.1m)と小柴山(標高 265.6m)からなる南北の分水嶺によって東西が分かたれ，東側に内浦，西側に釜谷という二つの集落が位置している。両集落共に人口はゆるやかな減少傾向にある[3]。粟島という島名については諸説あり，古くから「粟島」という名称が用いられていたことは「万葉集」にまで遡って確認できるとされる[4]。伴田(1983)による『粟島風土記』では，粟島の語源についてアイヌ語の「アウシシュウマ」から来たという説が紹介され，島名の変遷が示されている(第 1 表)。808 年の島名には蝦夷という文字がみられる(第 1 表太字)ほか，粟島島内には「カムラ」という場所があり，これはアイヌ語で「神」を意味する「カムイ」と浦を結びつけて作られたという。さらに，アイヌ語で「港」を指す「トマリ」が基になった「トマリ」「シモドマリ」「サドマリ」といった地名もみられる。このように，粟島における島名や地名の特徴として，アイヌ語から影響を受けていることがわかる。後述するように，「釜谷獅子舞」もまた蝦夷地から伝わってきた文化である為，古くからの粟島と蝦夷地の関わりは，「釜谷獅子舞」が伝播してきた背景と考えられる。

第 1 表　粟島における島名の変遷

西暦	島名	出典
808 年	粟生**蝦夷**	大同類聚方
1060 年	粟穂島	同上
1756 年	粟生島	越後名寄
1820 年	粟島	越後略風土記
1831 年	粟島（かな表記でアヲシマ）	小泉蒼軒遺書
1854 年	粟生島	越後野志
1877 年	粟生島	新潟県地図

伴田(1983)より筆者作成

２．粟島における海上交通の歴史

粟島は最寄りの港である新潟県岩船港から距離があり，古くは本土との交通が容易ではなかったという。江戸時代中期には，内浦の港は西廻り航路の避難港として機能していたものの，当時の粟島には北前船が入港できる港は存在せず，「島への上陸や物資の補充等は小さな伝馬船によってなされ」ていたと伝えられている[5]。伴田(1983)においては，粟島の海上交通の特徴として，「新潟と蝦夷を結ぶ重要な航路の基地であった」ことが述べられており，粟島を中継地点とした蝦夷地との交易の様子が記述されている。新潟からは米，酒，醤油，網苧(あしお)など，蝦夷地からは鮭塩引，塩鱒，数の子，筋子などがそれぞれ運搬されており，これらを積んだ船が粟島を中継基地として往来していた。ただし，港や航路は十分には整えられず，海難事故が多発していたとされる。本土との交通が本格的に整備され始めたのは，粟島が離島振興対策実施

地域に指定された 1953 年(昭和 28)以降であり，鋼造船「あわしま丸」が就航して岩船港までを結ぶようになるには，新潟地震後の 1966 年を待たねばならなかった[6]。1962 年には，内浦側の港が第四種漁港に，1963 年には釜谷側の港が第一種漁港として一旦工事が完了している。第四種漁港とは，漁港としてだけではなく，本土と結ばれた定期発着基地や，地元外船の避難港としての機能を併せ持った港を指す。この港が完成することによって，粟島と本土との安全な航路の確立が見込まれていたが，1964 年の新潟地震によって二つの港は機能を失うことになる。粟島村役場の所蔵文書[7]によると，粟島は「佐渡島飛鳥の中間に在る重要且つ随一の自然の避難港」であるが，地震によって「船溜港」としては不完全な状態であることが記され，「一般漁民の福利推進を図るべく第四種漁港への申請」が，1980 年に再び行われていることが確認できる。このことから，1980 年前後までは交通整備は不十分であった事がわかる。こうした歴史を経て，現在は 1990 年に新造された「フェリーあわしま」と，2011 年に就航した「高速船きらら」が運行されているが，便数は併せて一日四往復に留まっている。

以上の粟島と本土との海上交通の変遷から，粟島は長きに渡って交易の要所としての役割を果たしていたが，交通には困難があったことが窺える。本土と蝦夷から文化が伝わってくる土壌を有しつつも，海を隔てた位置にあるという特殊な状況は，粟島が独自の文化を創造・残存させてきた理由の一つといえよう。

３．内浦集落と釜谷集落における民俗の特徴

粟島の文化における独自性の根底には，島の集落が有する「民俗」の存在がある。福田(2000)は「民俗」を「一般的には，民衆の習わしとか民間の風俗・習慣などという意味で用いられる。…（中略）…民俗を伝承と慣習の複合体として捉えること…（中略）…典型的な民俗はこれらの三要素（伝承，慣習，民間信仰・俗信）からなるものとみなしうる」と定義する。これに倣うならば，民族は人々の生活と密接に結びついており，伝統・文化や信仰とも深く関わってくると考えられる。また，笹谷・中村(1984)においては，集落は「地形単位」「位置関係」「集落外への方向性」という三種類の空間構造からなる総体であり，民俗によって「一つの小宇宙を構成」するとされる。上記より，民俗は集落単位でも存在し得るものであり，伝統・文化と密接な関係にあるものとして捉えられる。したがって，「釜谷獅子舞」という伝統・文化の背景を描く上で，粟島の集落が有する民俗の特徴に触れることは不可欠と考えられる。

粟島は民俗学の宝庫として，多くの報告書や探訪記が出されている。北見(1973)は 1949 年の調査において，内浦と釜谷の二つの集落に注目し，次のように分析する。両集落は言語や苗字が異なり，民俗が「かなりの相違をみせている」。具体的には，内浦と比べて釜谷の立地は特殊であり，「集落位置」や「姓名」，「屋号」に「著しい差異」がある。北見はこの二つの要素から，内浦と釜谷の人々が「それぞれ出自を異にし，郷土からの来島時期にも差異のある二群の移住民」であると推測した。この推測を裏

付けるように，伴田(1983),および 91 年に改訂された『あわしま風土記　3 訂版』においては，「粟島にもともと居住していたのはエミシの民」であり，「8 世紀から 9 世紀にかけて北九州の海の民であったマツラが粟島に流れ着き，エミシとともに内浦に住み着いた」こと，加えて「本土沿岸の民ホンボが上陸」したことに伴い，エミシとマツラは釜谷に移動したことが記されている。さらに北見は，釜谷集落には「禁忌・忌の観念」が強く「古風な伝承が豊富」であること，対して内浦は「対岸の本土にみられる民俗と類似したものが多」いことから，内浦と釜谷における民俗の違いは，自然状況や信仰の差異によって表出していると結論付けた。

上記の北見の調査を踏まえ，吉田(1985)は 1982 年に内浦と釜谷の信仰に焦点付いた調査を行っている。まず，内浦で信仰を集めている神仏は，(1)太平山の三吉神社，(2)お不動様，(3)弁天様，(4)薬師様，(5)乳入観音，(6)山の神様，(7)小峯神社，(8)淡島様，(9)水神様，(10)ヤス突十一面観音・善宝寺様・金昆羅様，(11)観音寺と磧石塔婆，(12)八所神社と末社，(13)「三郎さま」風神，(14)地蔵様その他，以上の計 14 である。対して釜谷では，(1)塩釜大社神社・附近の堂祠，(2)古峰神社，(3)八幡神社・子之権現・善宝寺さま，(4)神棚・仏壇・門口に祀るもの，以上の計 4 つである。比較してみると，内浦と釜谷では同じ神仏を一柱として祭っておらず，とりわけ信仰の面では顕著に違いがあることがわかる。

写真 1　内浦集落内の祠
（2016 年 8 月 29 日　筆者撮影）

以上の釜谷集落と内浦集落の民俗は，第 2 表のようにまとめることができる。

第 2 表　内浦集落と釜谷集落の民俗

	内浦集落	釜谷集落
集落位置	東岸に位置する	西岸に位置する
地質	主として水成岩	主として火成岩
海岸線	比較的滑らか	複雑
烈風	厳しくはない	厳しい

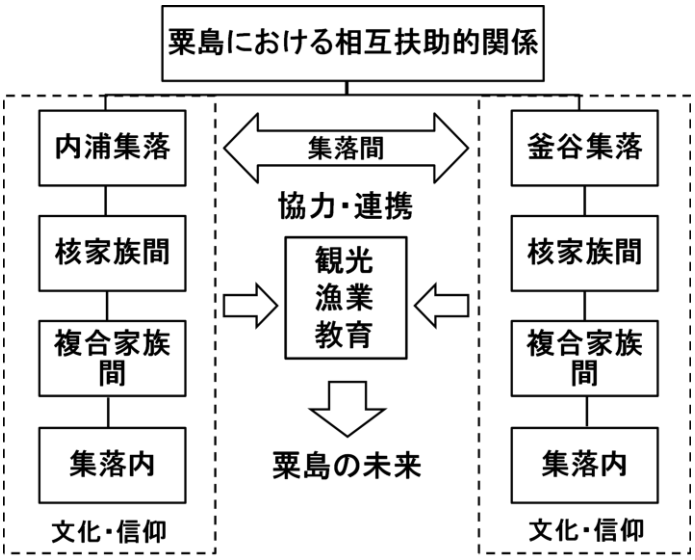
姓名	本保，脇川など	松浦，渡辺など
屋号	米蔵，平三郎，治平，仙太郎，豊八，善助など	仁右衛門，彦左衛門，彦五郎など
葬制	子供だけの墓地あり	地蔵堂内のショーツカの婆が着物をぬぐと村に死人がでる予兆とされる。禁忌が強い
信仰	(1)太平山の三吉神社，(2)お不動様，(3)弁天様，(4)薬師様，(5)乳入観音，(6)山の神様，(7)小峯神社，(8)淡島様，(9)水神様，(10)ヤス突十一面観音・善宝寺様・金昆羅様，(11)観音寺と磧石塔婆，(12)八所神社と末社，(13)「三郎さま」風神，(14)地蔵様その他	(1)塩釜大社神社・附近の堂祠，(2)古峰神社，(3)八幡神社・子之権現・善宝寺さま，(4)神棚・仏壇・門口に祀るもの

北見(1973),吉田(1985)より筆者作成

後述するが，神楽という伝統・文化は古来より信仰と結びついている為，このような信仰の違いは内浦と釜谷に二種類の神楽が存在する理由であると同時に,「釜谷獅子舞」が伝統・文化としての独自性を有する背景の一つになっていると考えられる。

４．粟島における人々の「相互扶助的関係」と文化・信仰

次に，粟島における文化と信仰のコミュニティ内での位置付けについて触れたい。島内では血縁的コミュニティが集落内に残存しており，「相互扶助的関係」が今に至っても維持されている。山田(2007)は，次のような四つの例を挙げて「相互扶助的関係」を説明する。第一に，核家族単位での協力である。具体的



第１図　粟島における相互扶助的関係の構造

には，家族ぐるみで行われている民宿経営において，父親が客の送迎，子どもが世話，母親が料理をつくるといった役割分担が行われている。第二に，複合家族単位での協力である。具体的には，住居を別にする親世帯が漁業に徹し，採れた魚を民宿を経営する息子世帯に届けるといった協力関係が存在している。第三に，集落単位での協力である。具体的には，自家用に栽培している野菜を集落内で分け合うといった協力関係がある。この際，金銭の授受がある場合とない場合の両方がみられるとされる。第四に，釜谷と内浦，二つの集落間での協力である。民俗に違いを持つ二つの集落は，1969 年に内浦から釜谷への県道が開通するまで，互いの往来は小舟によるものに限定されていた。しかしながら，現在の粟島においては，網漁の協同化や島の観光開発を通じて「2 集落で 1 つのコミュニティという意識が確立され，集落間の格差もほとんどなくなった」とされる。一方で，「同姓の血縁的コミュニティ」が維持され，「祭事や日常生活における基本単位」として，「二つの集落の差異は尊重され」ている。島民の高齢化，および地域伝統文化を含めた地域の後継者不足は課題となっているが，この「相互扶助的関係」のもとで，両集落が協力して島を盛り立てていこうとする方向性にあるといえるだろう（第 1 図）。注目すべきは，協力関係の中でも両集落の差異として，文化・信仰が保持されている点である。集落間での文化的差異を尊重する姿勢は，「釜谷獅子舞」が，今日に至っても独自の伝統・文化として温存されている要因と考えられる。

Ⅲ.「釜谷獅子舞」の位置づけと概要

本章では，ここまでに明らかにしてきたことを背景とする「釜谷獅子舞」の位置づけと概要について明らかにする。まず一般的な「神楽（かぐら）」の起源と特性に触れた上で，粟島の年中行事における「釜谷獅子舞」の位置づけと概要を示す。さらに，Ⅱで具体的にした「釜谷獅子舞」の背景との繋がりを指摘する。

1. 神楽の起源と特性

「神楽」の語源は「神座（かむくら）」という言葉が「かんぐら」，「かぐら」と変化していったという説が有力である[8]。神楽・神座は信仰の歴史と密接に結び付いており，神を座に迎えて祈祷の祭祀を行うことで，長寿や豊作を祈ったり，災難を回避することなどが目的とされる。吉川（1995）によれば，神楽は伝統・文化として北海道から鹿児島県まで広く分布しており，地域によってその形態は異なっているが，殆どの場合「共同体のもっとも重要な祭りとして行われている」とされる。また，民俗舞踊の一種としての神楽は複雑な動作の舞踊を含み，信仰と関係して「神が人にのりうつる」神がかりをする点に特徴がある。

さらに吉川（1991）によれば，舞踊の一種としての神楽の特徴は，「ウゴキ」と「音楽」と「言葉」であるという。粟島における神楽である「釜谷獅子舞」もこの例外で

はなく，「獅子頭」と「獅子の身体」に分かれた独特の「ウゴキ」と，伝統の祝い唄という「音楽」，粟島の方言を用いた「言葉」をそれぞれ有している。このことから，「釜谷獅子舞」は，釜谷集落という共同体において信仰と結び付いて祭り等に利用される，集落の特性を色濃く反映した伝統・文化として捉えることができる。

２．年中行事における「釜谷獅子舞」の位置づけと概要

次に，「釜谷獅子舞」の位置づけと具体的な内容について明らかにする。現在の粟島では，伝統・文化が年中行事として島民にとって身近なものとなっている。この年中行事や祭りにおいて，粟島観光協会役員や釜谷獅子舞保存会の会員らが中心となり，伝統・文化の一つとして「釜谷獅子舞」が位置づけられている。第３表は『あわしま風土記　３版』に記載されている粟島の年中行事表から，「釜谷獅子舞」と関係した行事を抜粋したものである。

第３表　粟島の年中行事における「釜谷獅子舞」の位置づけ

日付	祭りや年中行事	備考
1 月 11 日	乗りそめ	納屋方（鰯網の船元）が，子方（船子）をまねき，船にお神酒を供える。酒宴を開いてその年の豊漁を祈って神楽を舞う。
1 月 17 日	年祝い・小正月	別名としてオタヨまいりと呼ばれ，厄年の人が参詣に行く。神楽が舞われる。
1 月 25 日	初神楽	釜谷地区，神社で神楽を舞う。
2 月 10 日	漁神楽	お宮に上がり，酒宴を開きながら神楽を舞う。
11 月 10 日	しまい神楽	その年の舞おさめを神社で行う。

伴田(1983)より筆者作成

「釜谷獅子舞」は 1863 年に，釜谷集落の渡辺源次郎によって，北海道松前より伝来した獅子舞がルーツであるとされる。先述したように，粟島と蝦夷地には古くから地名の繋がりや交易での関わりがあり，「釜谷獅子舞」もそういった結びつきの中に位置付いていると考えられる。「釜谷獅子舞」(写真 2)の具体的な内容は，「獅子舞に扮した踊り手たちが釜谷集落内の一軒一軒を廻り，祝い唄である『さっこい』と『さんさ

写真２　「釜谷獅子舞」
釜谷獅子舞保存会より提供

がり[9]』を唄いながら，悪魔祓いの舞を踊ること」とされる[10]。また，第3表で示した粟島島内における「釜谷獅子舞」の位置からは，1月の「乗りそめ」や2月の「漁神楽」といった祭礼が漁業と関連していることが確認できる。このことから，「釜谷獅子舞」は粟島の祭礼や年祝いの中でも，とりわけ漁業との関わりが強い伝統・文化であることがわかる。さらに2011年には，国土交通省が主催した「アイランダー2011」[11]において，粟島の伝統・文化として本土の人々に向けて発表がなされており，島内に留まらない展開をみせている。

「釜谷獅子舞」では，かつては釜谷地区の30戸全てから男性が一人ずつ踊り手として参加していたが，現在は「釜谷獅子舞」の伝承を行う「釜谷獅子舞保存会」の総数が12名である。釜谷地区は伝統を保持しようとする姿勢が根強い為，会員の多くは男性に限られており，女性や島外住人の入会が困難であることも一因となって，後継者の不足は課題とされている。以上の「釜谷獅子舞」に関する概要をまとめたものが，第4表である。

第4表　「釜谷獅子舞」の概要

起源	1863年(文久3年)に蝦夷地(北海道)より伝来
用いられ方	厄払い，漁業の無事を祈願
内容	獅子頭被り2人，謡太鼓3人，踊り4人の9人が獅子舞に扮し，釜谷集落内を廻りながら，祝い唄「さっこい」と「三下がり」を唄って悪魔祓いの踊りを舞う
団体名	釜谷獅子舞保存会　総勢12名
使用楽器	太鼓2個
島外での主な活動状況	2011年11月26，27日　「アイランダー2011　島に行こう！島で暮らそう！」　池袋
祝い唄「さっこい」の歌詞	アー　さっこい持てこい　荷縄でしょってこい　此の家の内まで　さっこい持てこい目出度サエー　コラ　目出度がヤーレ三つ重コラ　また　なればエー　天の岩戸もヤーレホンニ　押し開く　サハエー　目出度サエー　コラ　目出度がヤーレ三つ四つ五つナー　五つ重なるヤーレホンニ　五葉の松　サハエー目出度サエー　コラ　目出度のヤーレ　若松コラ　また　様はナー　枝も栄えてヤーレホンニ　葉も茂る　サハエー　今年サエー　コラ　稲の穂がヤーレ束に一斗三升五合だネー　枡に計らねでヤーレホンニ　空箕で計る　サハエー　器量のサエーコラ　手拭など　汚れだら持ってござれ殿さノー　洗うで納戸

	ヤーレホンニ　掛竿に掛げだコラサハエー　雌蝶サエー　コラ　また緑はナー　離れまいとのヤーレホンニ　束ねのし　コラサハエー　同じサエー　コラ　踊りはまた　踊り子がコラ　また飽きるナー　先ずはこれにてヤーレホンニ　品替わり　サハエー　エヤ　さっこい　こらこら　こらこらこい
祝い唄「さんさがり」の歌詞	エヤ　ウイソイキタハイ　あらこら　こんにゃく　豆腐の田楽　鰊棒巻　食うどぎゃいいども　かけ出し思えば涙ど小便な　いっしょに出ますぞ　へえへえでば　なつきょだこうた　ハエヤノー　上州のあさかい育ちヨー　米のなる木がみっとうござる　二番　札所で御籤を引けば　当る一番　大の吉　門に門松　三階小松　かかる白雪皆黄金　踊りいささか師匠とってなろうだ　師匠に劣らぬ竹の節　ここの屋形は目出度い屋形　鶴と亀とが舞い遊ぶ　磯で曲り松　港で女松　中の祝松男松　人も草木も盛りは花よ　心萎まず勇んで踊れ　あまり長いは御座の障り　まずはこれにて止め置きまする　いや　おいそい　きたはい

伴田(1983),「釜谷獅子舞保存会」会員からの聞き取り

「釜谷獅子舞」の概要からは，蝦夷地から伝わってきていることや，漁業の無事を祈祷するものとして用いられることなどから，Ⅱで具体的にした伝統・文化の背景と関連した特徴を確認できる。また，宗教と関連する要素や後継者を男子に限定し，伝統を保持しようとする姿勢からも，釜谷集落が有する独自の民俗に影響を受けていることがわかる。以上から,「釜谷獅子舞」は粟島の地理的特徴，および釜谷集落の民俗を背景として，それらに深く結びついた伝統・文化として理解することができよう。

Ⅳ．「釜谷獅子舞」に関する意識調査

ここまでの章において,「釜谷獅子舞」の背景と位置付け，概要について明らかにしてきた。本章では,「釜谷獅子舞」に関する質問紙調査の結果を示した上で，子どもの意識について考察を行う。

１．質問紙調査の概要

質問紙調査は，粟島浦村立粟島浦小・中学校の児童 14 名・生徒 10 名の計 24 名を対象とした。調査時期は 2016 年 8 月で，質問内容は以下の 9 問である。

・あなたは何年生ですか。(選択肢)
・あてはまる性別に〇をつけてください。(選択肢)
・あなたの出身地について，当てはまる方に〇をつけてください。(選択肢)

・釜谷獅子舞を知っていますか。（選択肢：複数回答可）
・釜谷獅子舞をどこで知りましたか。（選択肢：複数回答可）
・釜谷獅子舞について，知っていることすべてに〇をつけてください。（選択肢：複数回答可）
・釜谷獅子舞について，知りたいと思いますか。（選択肢）
・釜谷獅子舞について，学校で習ってみたいと思いますか（選択肢）
・あなたにとっての釜谷獅子舞を一言でお願いします（自由記述）

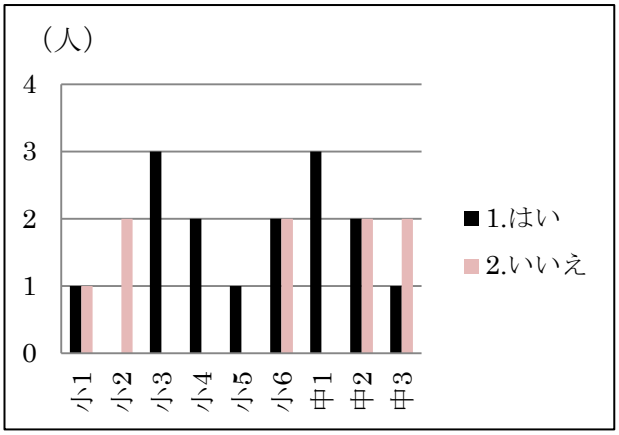
以下では調査結果を示すとともに，粟島浦村小・中学校の児童・生徒たちが「釜谷獅子舞」に対してどのような意識を持っているのかについて考察を行う。

２．質問紙調査によって得た結果の分析

a）　釜谷獅子舞を知っているかについての調査

児童・生徒たちが「釜谷獅子舞」について知っているかについて質問紙を用いて調査した。質問紙の選択肢は「はい」「いいえ」の二つを設けた。

第２図の結果を見ると，「はい」を選んだ児童が 14 人中 9 人, 生徒が 10 人中 6 人, 合計で 24 人中 15 人と，全体の半数以上が「釜谷獅子舞」の存在を知っていることがわかる。



第２図　「釜谷獅子舞」を知っているかについての調査結果

また，小学校３・４・５年生，中学校１年生の計９名は学年全員が「釜谷獅子舞」のことを知っている「はい」を選択したのに対し，小学校２年生２名は全員が「釜谷獅子舞」のことを知らない「いいえ」を選択している。さらに，小学校１・６年生，中学校２・３年生の計 13 名の回答には「はい」と「いいえ」が混在しており，全員が知っている学年，全員が知らない学年，知っている児童・生徒と知らない児童・生徒が混在している学年があることがわかる。

b）　釜谷獅子舞を知った場所についての調査

「釜谷獅子舞」を知っている児童・生徒に対し，「釜谷獅子舞」をどこで知ったかについて，質問紙を用いて調査した。質問紙の選択肢は，「学校」「家」「お祭り」「学校の課外活動」「地域の集まり」「釜谷獅子舞保存会の活動」「その他」の７つを設けた。なお，学校においては運動会の催し物として「釜谷獅子舞」で唄われる「さっこい」

と「さんさがり」を踊る為，その練習を体育の時間に行っている。この時，踊りについて知っている地域の人々が学校まで出向き，児童・生徒に踊りを教える役目を担っている。写真３は粟島浦小・中学校で行われた「さっこい」と「さんさがり」踊りの様子である。このように，「釜谷獅子舞」に関係する伝統・文化が学校で学ばれていることが窺える。

写真３　学校で行われる「さっこい」「さんさがり」
（2016 年 8 月 29 日　筆者撮影）

第５表　「釜谷獅子舞」を知った場所についての調査結果

小学校							
選択肢	１年	２年	３年	４年	５年	６年	計
家	0	0	1	2	0	1	4
学校	0	0	0	0	1	2	3
学校の課外活動	0	0	0	0	0	0	0
お祭り	0	0	1	0	0	1	2
地域の集まり	1	0	1	0	0	0	2
釜谷獅子舞保存会の活動	1	0	1	0	0	0	2
その他	0	0	1	0	0	0	1

中学校				
選択肢	１年	２年	３年	計
家	0	0	1	1
学校	1	0	0	1
学校の課外活動	1	0	0	1
お祭り	3	0	1	4
地域の集まり	0	1	1	2
釜谷獅子舞保存会の活動	0	0	0	0
その他	0	1	1	2

調査結果から，「釜谷獅子舞」を知った場所は，児童・生徒共にそれほど偏りがないことがわかる。児童が知った場所で一番多いのは「家」の 4 人，次いで「学校」の 3 人，「お祭り」，「地域の集まり」，「釜谷獅子舞保存会の活動」の 2 人が続く。「その他」の 1 人は，「人から聞いた」という内容であった。生徒が知った場所は，「お祭り」が 4 人で最も多く，「地域の集まり」と「その他」の 2 人が次点である。こちらの「その他」も，「知り合いに聞いた」という内容であり，コミュニティ内で「釜谷獅子舞」について知る機会があることが窺える。また，小学校 5・6 年生から中学校 1 年生では「学校」で「釜谷獅子舞」を知ったという回答が確認できる（第 5 表網掛け部分）。

c)　「釜谷獅子舞」について知っていることの調査

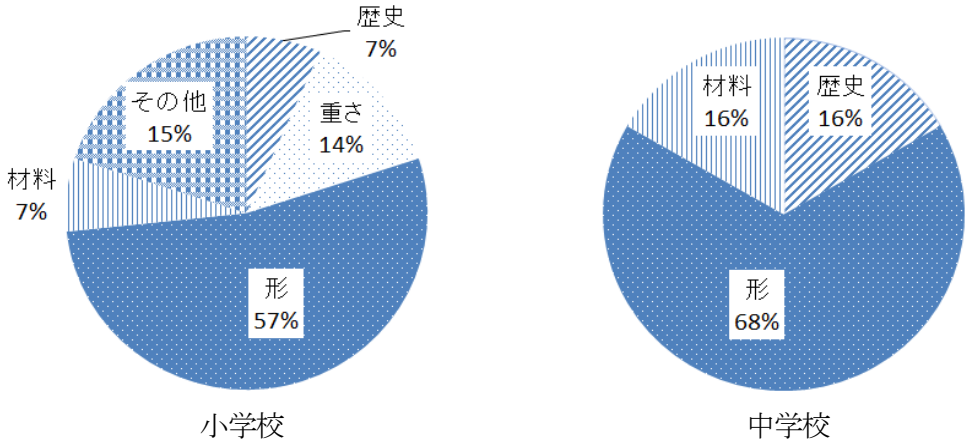
「釜谷獅子舞」を知っている児童・生徒に対し，「釜谷獅子舞」について知っていることについて質問した（第 6 表および第 3 図）。選択肢は，「歴史」「重さ」「形」「材料」「その他」の 5 つを設定した。

第 6 表　釜谷獅子舞についての知っていることの調査結果

小学校							
選択肢	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	計
歴史	0	0	0	0	0	1	1
重さ	0	0	1	0	0	1	2
形	1	0	2	2	1	2	8
材料	0	0	0	0	0	1	1
その他	1	0	1	0	1	0	3

中学校				
選択肢	1 年	2 年	3 年	計
歴史	1	0	1	2
重さ	0	0	0	0
形	2	2	0	4
材料	0	0	1	1
その他	0	0	0	0

調査結果で目立つのは，児童・生徒ともに「釜谷獅子舞」の「形」について知っている人数が多いということである。小学校 1・5 年生が 1 人ずつ，3・4・6 年生が 2 人ずつで，児童が計 8 人で全体の約 57%，中学校 1・2 年生が 2 人ずつで生徒は計 4 人で全体の 68%と，児童・生徒共に過半数以上が「釜谷獅子舞」の「形」について知っていることが明らかとなった(第 3 図)。また，「学校」で「釜谷獅子舞」を知った割



第３図「釜谷獅子舞」について知っていることの調査結果

合が高かった小学校５・6，中学校１年生の児童・生徒は他の学年の児童・生徒と比較して多くの「知っていること」があり，特に６年生の回答には「歴史」「重さ」「形」「材料」の全てを知っている児童もみられた。さらに「その他」の回答に注目すると，小学校１年生の児童は「秋になるとやっていること」，小学校５年生の児童は「どんなことをするか」といった記述を行っており，学年が上がるにつれて知っていることが具体的になっていることが窺える。

d)　「釜谷獅子舞」について知りたいと思うかについての調査

「釜谷獅子舞」を知らない児童・生徒に対し，「釜谷獅子舞」について知りたいと思うかどうかについて質問を行った（第７表）。選択肢として，「知りたい」「やや知りたい」「あまり知りたくない」「知りたくない」「その他」の５つを設けた。

第７表　「釜谷獅子舞」について知りたいと思うかについての調査結果

小学校							
選択肢	１年	２年	３年	４年	５年	６年	計
知りたい	0	0	0	0	0	1	1
やや知りたい	0	1	0	0	0	1	2
あまり知りたくない	0	0	0	0	0	0	0
知りたくない	1	1	0	0	0	0	2
その他	0	0	0	0	0	0	0

中学校				
選択肢	１年	２年	３年	計

知りたい	0	0	0	0
やや知りたい	0	0	2	2
あまり知りたくない	0	1	0	1
知りたくない	1	0	0	1
その他	0	0	0	0

集計結果を概観すると，現在「釜谷獅子舞」を知らない児童・生徒９名のうち，半数以上である５名が「知りたい」または「やや知りたい」という「釜谷獅子舞」への関心を示す回答を行っていることがわかる。また，児童の回答では，小学校１・２年といった低学年では「知りたくない」回答が目立つのに対して，高学年である６年生では「知りたい」「やや知りたい」といった回答が目立っている。中学校においても，生徒のうち，最高学年である３年生は「やや知りたい」という回答がみられる。このことから，学校内での学年が上がるにつれて，「釜谷獅子舞」に対する関心を示す割合が増していると考えられる。

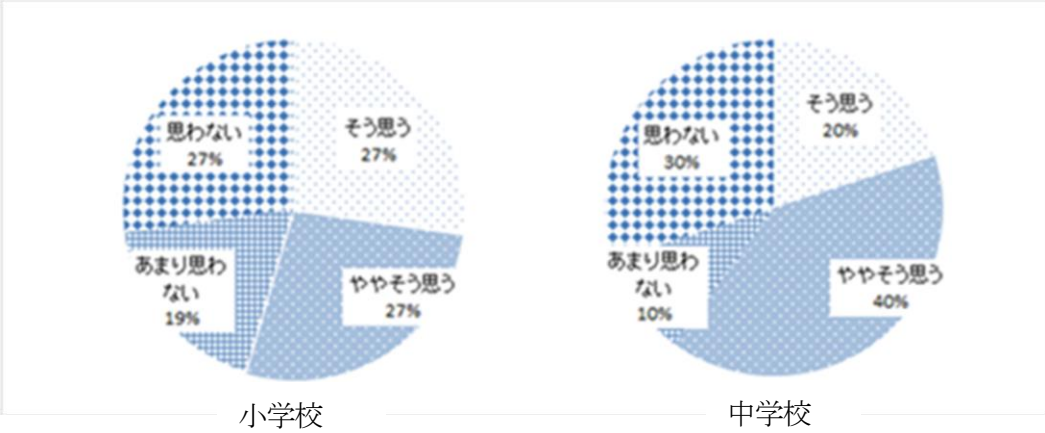
e)　「釜谷獅子舞」を学校で習ってみたいと思うかについての調査

「釜谷獅子舞」を知っている児童・生徒，知らない児童・生徒の両方に対して，「釜谷獅子舞」を学校で習ってみたいと思うかについて質問を行った。選択肢は，「そう思う」「ややそう思う」「あまり思わない」「思わない」「その他」の５つを設定した。

第８表　釜谷獅子舞を学校で習ってみたいかについての調査結果

小学校							
選択肢	１年	２年	３年	４年	５年	６年	計
そう思う	0	0	0	0	1	2	3
ややそう思う	0	0	0	1	0	2	3
あまり思わない	0	1	0	1	0	0	2
思わない	1	1	1	0	0	0	3
その他	0	0	0	0	0	0	0

中学校				
選択肢	１年	２年	３年	計
そう思う	1	1	0	2
ややそう思う	1	0	3	3
あまり思わない	1	0	0	1
思わない	0	3	0	3
その他	0	0	0	0



小学校　　中学校

第 4 図　釜谷獅子舞について，学校で習ってみたいと思うかについての調査結果

有効な回答 20 名分のうち，児童 6 人，生徒 5 人の計 11 人から「そう思う」，または「ややそう思う」といった「釜谷獅子舞」について学校で習うことに意欲的な回答を得られた。また，学校で「釜谷獅子舞」を知ったと思われる小学校 5・6 年生，中学校 1 年生においては，「そう思う」が計 4 人，「ややそう思う」が計 3 人と，特に学校で「釜谷獅子舞」を習うことに肯定的な回答が集中していることがわかる（網掛け部)。先述した「釜谷獅子舞」について知っていることについての回答も併せて考えると，学校で「釜谷獅子舞」について知る何らかの機会を得た児童・生徒には，「形」や「歴史」，「重さ」，「材料」といった「釜谷獅子舞」についての「知識」に加え，学校でさらに習ってみたいという意欲が芽生えていることが示唆される。

f)　児童・生徒が釜谷獅子舞についてどのように考えているかに関する調査

「釜谷獅子舞」を知っている児童・生徒，知らない児童・生徒の両方に対して，「釜谷獅子舞」について思っていることを自由記述形式で調査した。

第 9 表　児童・生徒が「釜谷獅子舞」について思っていることの調査結果

学年	性別	出身地	記述内容
小 1	女	島内	わからない
小 1	男	島外	わからない
小 2	女	島内	わからない
小 2	女	島外	よく知らない
小 3	女	島外	つまみがある
小 3	男	島内	いいものだ！！
小 3	男	島外	しーらーん

小４	女	島内	いいものだ
小４	男	島外	たのしいものだ
小５	男	島外	楽しいと思うもの
小６	女	島外	知りませんでした…
小６	男	島外	**元気づけてくれる宝物です**
小６	男	島外	無回答
小６	男	島外	**おどりがすごくはげしい**
中１	男	島外	**面白いおどりだと思う**
中１	男	島外	おもしろい
中１	女	島外	たべるのがたのしい
中２	男	島外	**大切だとおもう**
中２	女	島内	見て楽しむもの
中２	女	島外	？
中２	男	島外	どーでもいい
中３	女	島外	まだよく分からない
中３	女	島外	**歴史をしるための大切なこと**
中３	女	島外	分からない

回答からは，「楽しい」「面白い」といった感想の他に，学校で「釜谷獅子舞」を知ったであろう小学校６年生，中学校１年生のみに「踊り」に注目した記述がみられる（太字）。これは，体育の時間に祝い唄の「さっこい」「さんさがり」について体験する機会があった為と推測できる。また，「元気づけてくれる宝物」，「大切」，「歴史をしる」といった記述（網掛け部分）もみられる。このことから，一部の児童・生徒は「釜谷獅子舞」対して，面白い，大切，宝物，といった価値を感じていることがわかる。

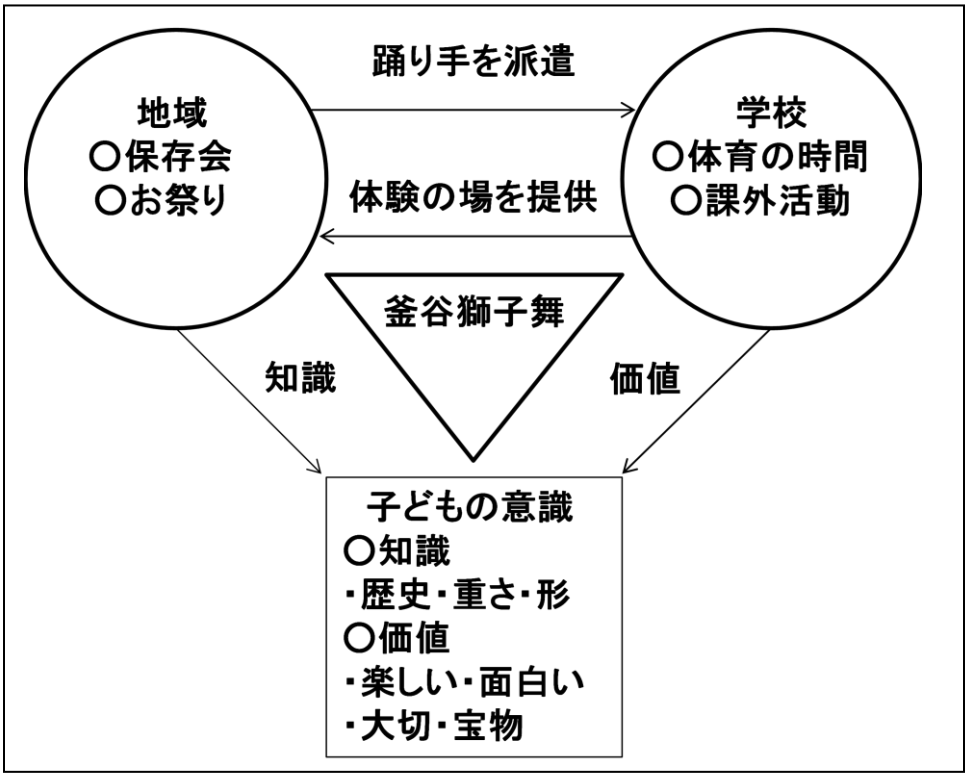
一方で，特に低学年を中心に「よく知らない」といった記述が目立っており，「釜谷獅子舞」についての知識が十分ではない。さらに，中学二年生の女子においては「見て楽しむもの」といった記述がなされ，「釜谷獅子舞」について知ってはいても，必ずしも参加意識が高くはないことが窺える。

３．「釜谷獅子舞」に関する児童生徒の意識と地域・学校の関係

質問紙調査によって得られた結果から，「釜谷獅子舞」に関する子ども達の意識について，次のように考えることができる。粟島浦村小・中学校の児童生徒の半数以上が「釜谷獅子舞」の存在を知っている。彼（彼女）らが「釜谷獅子舞」を知った場所は，「家」や「学校」，「お祭り」や「地域の集まり」，さらには「釜谷獅子舞保存会の活動」と多様である。まず，「知った場所」と「知っていること」の調査結果から，子ども達

の意識に対して，保存会の活動やお祭りは主に「釜谷獅子舞」の「形」や「歴史」といった知識方面での影響を与えているといえる。次に，「学校」で「釜谷獅子舞」を知った児童生徒は，その他の場所で知った児童生徒と比べ，「釜谷獅子舞」に対して学校で習ってみたいという意欲がみられたり，「宝物」や「大切」といった自由記述の回答がみられる。このことから，「学校」での学びが契機となり，子どもたちの意識における「釜谷獅子舞」に関する価値認識が変容していることが窺える。その原因としては，学校が体育の時間等に，保存会の人と協力して「釜谷獅子舞」の祝い唄「さっこい」「さんさがり」について体験する時間を設けていることが挙げられる。体験を通じた学びが子ども達の内面に働きかけた事例の一つといえよう。

ここまでの考察から以下のことが明らかになった。子どもの「釜谷獅子舞」に関する意識は，「歴史」「重さ」「形」といった知識面と，「楽しい」「面白い」「大切」「宝物」といった価値面の大きく二つがみられる。知識については釜谷獅子舞保存会を中心とする地域の人々やお祭りなどの催し物が影響を与え，価値については体育の時間を中心とした学校での体験が大きな役割を担っている。さらに，地域は踊り手を派遣し，学校は体験の場を提供することで，「釜谷獅子舞」を核とした相互の協力関係にある。上記の内容をまとめたものが，第５図である。



第５図　釜谷獅子舞に対する児童生徒の意識と地域・学校との協力関係

Ⅴ．おわりに

本研究においては，伝統・文化学習を拡張的・生成的な学びとする為に，子どもの伝統・文化に対する意識の実態を捉えるべきであるという問題意識のもと，新潟県粟島における伝統・文化である「釜谷獅子舞」に注目した調査を行った。

まずⅡでは，島名や海上交通といった歴史に加え，釜谷集落の民俗の分析から，「釜谷獅子舞」が有する背景を明らかにした。具体的には，1)粟島における島名や地名は，蝦夷地，およびアイヌ語から影響を受けている。2）粟島は長きに渡って交易の要所としての役割を果たしていたが，交通には困難があった。3）内浦と釜谷では同じ神仏を祭っておらず，信仰の面では顕著に違いがある。4）近年の粟島における集落間の「相互扶助的関係」の中でも，両集落の差異として文化・信仰が保持されている。以上 4 点が明らかになった。「釜谷獅子舞」が北海道（蝦夷）から伝搬してきたことや，内浦とは異なる釜谷集落に独自の神楽として「釜谷獅子舞」が存在していることなどから，この 4 点は「釜谷獅子舞」が有する背景として捉えることができる。

次にⅢでは，粟島における「釜谷獅子舞」の位置づけと概要について明らかにした。「釜谷獅子舞」は島内の年中行事に位置付けられ，住民から親しまれている。また，「釜谷獅子舞」の概要からは，蝦夷地から伝わってきていることや，漁業の無事を祈祷するものとして用いられることなどから，Ⅱで明らかにした背景と関連した特徴を確認できた。

さらにⅣでは，ⅡとⅢで背景を具体的にした「釜谷獅子舞」に対する児童・生徒の意識について明らかにした。加えて，「釜谷獅子舞」を中心とする地域と学校の関係が，児童・生徒の意識に如何なる影響を与えているのかについて考察を行った。質問紙調査で明らかになったことは，次のようにまとめられる。「釜谷獅子舞」は，粟島浦村立小・中学校に通う児童・生徒の約半数以上に存在を認知されている。その要因としては，釜谷獅子舞保存会の活動や地域の祭りに加え，学校で「釜谷獅子舞」について知る機会があったことが挙げられる。また，子どもの「釜谷獅子舞」に関する意識には，「歴史」「重さ」「形」といった知識と，「楽しい」「面白い」「大切」「宝物」といった価値の二種類が確認できた。価値については，体育の時間を中心とした，学校で「釜谷獅子舞」の踊りと唄に「参加」する体験が大きな役割を担っている。ここから示唆されるのは，実際に伝統・文化に「参加」する機会を得ることが，子どもの伝統・文化に対する価値に影響を与えているということである。このことから，離島の学校に通う子どもたちが，身近な伝統・文化に対してどのような意識を持っているのかを明らかにできたと共に，伝統・文化学習を子どもの内面に働きかける拡張的・生成的なものにしていく上で，「参加」する機会を設けることの重要性を再確認することができたといえる。以上が本稿で明らかになった知見である。

今回の調査では粟島における二つの集落のうち釜谷に範囲を限定し，「釜谷獅子舞」

に焦点づいた研究に留まった。しかしながら，粟島には釜谷集落の他に内浦集落が存在する事は本稿でも触れたとおりであり，そちらには「釜谷獅子舞」とは似て非なるもう一つの伝統・文化として「内浦神楽」が存在している。「釜谷獅子舞」だけではなく，「内浦神楽」の背景や特徴を明らかにすることで，粟島における神楽の全体像を描くことができる。また，児童・生徒に対して「内浦神楽」に関する意識調査を行い，本稿で得られた結果と比較することで，二つの獅子舞とその背後にある集落の独自性をより鮮明にできると考える。この点を課題として，粟島での調査を継続したい。

謝辞

本稿の作成にあたり，「釜谷獅子舞」に関する資料をいただいた釜谷獅子舞保存会，並びに粟島観光協会の皆様，「さっこい」「さんさがり」踊りと唄を披露してくださった皆様，質問紙調査にご協力いただいた粟島浦村立粟島浦小学校，中学校の皆様，貴重な非公開資料をご提供いただいた新潟県立文書館の皆様には，大変お世話になりました。また，筑波大学の井田仁康先生，國分麻里先生のお二方には，粟島での調査を通じて丁寧なご指導をいただきました。さらに，人間総合科学研究科の諸先輩方には多くの助言と励ましの言葉をいただきました。以上の方々に，この場を借りて深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

注（URL は 2017 年 8 月 5 日時点）

1）大畑(2010)は伝統・文化に対する関心の低下によって，伝統・文化学習が態度形成や人間形成に結び付いていかないことを問題点として指摘している。

2）「平成 28 年度　全国学力・学習状況調査　調査結果資料【全国版／小学校】」における問 35「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」を参照した。http://www.nier.go.jp/16chousakekkahoukoku/factsheet/16primary/

3）「平成 27 年国勢調査結果（新潟県分）」(pp.1-9)を参照した。
http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Article/40/538/27kokutyo_houdousiryo0125.pdf

4）北見(1973,p.629)の記述を参照した。

5）粟島は避難港としての役割を持っていたにも関わらず，港の整備が不十分であり，小型の伝馬船によってのみ本土との行き来がなされていた。このことは，北見(1973)や山田(2007)など，粟島に関する文献で共通して記載される内容である。

6）山田(2007, p.184)の記述を参照した。

7）新潟県立文書館にて入手した非公開資料，打越賢郎(1980)『粟島村役場所蔵文書』を参照した。

8）NPO 法人いわて芸術文化技術共育研究所(2010)「神楽，その起源と歴史」を参照

した。http://www.tohoku21.net/kagura/history/kigen.html

9）「さっこい」と「さん下がり」は粟島を代表する民謡である。2014 年 4 月 27 日に，NHK の歌番組において，民謡歌手である木津かおりによって歌われた。

10）「釜谷獅子舞保存会」の会員への聞き取り調査と提供資料に基づく。

11）国土交通省(2011)「アイランダー2011 の開催について」を参照した。
http://www.mlit.go.jp/common/000170975.pdf

文献（URL は 2017 年 8 月 5 日時点）

生田久美子(2003)：子どもたちの想像力を育む. 佐藤学編『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』，東京大学出版会，pp.170-187.

大畑健実(2010)：小学校社会科における伝統・文化学習のモデル授業開発―第 6 学年単元「室町文化」における態度形成を視点として―. 社会系教科教育学研究, (22), pp.91-100.

北見俊夫(1973)：『日本海上交通史の研究―民俗文化史的考察』，鳴鳳社，810p.

笹谷康之・中村良夫(1984)：農村集落の民俗構成に関する研究. 造園雑誌,**48**(5), pp.318-323.

伴田幸一郎編(1983)：『あわしま風土記』，粟島浦村教育委員会，83p.

中村久子・高橋和子(2009)：徳島県の伝統文化「阿波踊り」の教材化に向けた基礎的研究.　日本女子体育連盟学術研究, (25),pp.1-12.

林隆紀(2016)：モノと社会の関わり　京都市東山区における着物に関する意識調査. 佛教大学社会学部論集, (62),pp.45-54.

福田アジオ(2000)：『日本民俗大辞典下』，吉川弘文館, 1134p.

風土記編集委員会編(1991)：『あわしま風土記　3 訂版』，粟島浦村教育委員会, 102p.

三浦俊一・大谷良光・大野絵美(2009)：弘前ねぷた祭り運行団体と子ども・学校との関わりの現状と意識.　弘前大学教育学部紀要, (102),pp.125-132.

峯岸創(2007)：学校教育における伝統文化の意義(特集　学校における伝統と文化に関する教育の推進). 中等教育資料 **56**(9),pp.14-17.

文部科学省(2002)：文化芸術の振興に関する基本的な方針　2002 年 12 月 10 日発表. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k20021217001/k20021217001.html

山田浩久(2007)：新潟県・粟島における特徴的な集落形態と産業構造. 平岡昭利編『離島研究Ⅲ』，海青社, pp.181-194.

吉川周平(1991)：日本伝統舞踊の要素と構造. 舞踊學,(13),p.22.

吉川周平(1995)：神楽と舞踊―日本伝統舞踊研究の素材と方法をめぐって―. 舞踊學,(17),pp.115-116.

吉田郁生(1985)：「粟島」の神様・仏さま. かみくひむし,(58), pp.1-11.